

少年柔道の保護者に関する意識調査

—カナダ・リッチモンド市S柔道クラブの場合—

Consciousness Survey on Parents of Juveniles Judo.

— A Case of Richmond City S Judo Club in Canada —

齋藤 正俊

SAITO Masatoshi

要旨：この研究は、カナダにおける少年柔道の保護者に対する意識調査である。世界には様々なスポーツがあり、日本の柔道もスポーツとしてとらえられている。日本国内では武術から発展した伝統的運動文化として捉えられ、学校体育に取り上げられている。一方、怪我の危険性をはらんだ運動としても捉えられている。その柔道をなぜカナダの保護者は子ども達に習わせているのか。その保護者の意識を調査し、結果より日本で少年部の指導を考える一助となれば良いと思っている。

Abstract

This study is a consciousness survey of parents of juveniles doing judo in Canada. There are various sports in the world, and Japanese judo is also taken as a kind of sport. In Japan, judo is regarded as body movement developed under traditional cultural context based on the skills of martial art, and it is practiced in school physical education. At the same time, Judo is also seen as an exercise having a risk of physical injury. Then what motivates Canadian parents to make their children practice judo? I would like to investigate the consciousness of the parents and, from the result, to help us consider the guidance of the juvenile in Japan.

For this research paper we surveyed a group of parents whose children are learning judo in Canada. There are various sports in the world, and in the world's view judo is often considered as a sport. However, in Japan judo is not seen in this way, based on the skills of martial arts it is regarded as a combination of body movement and Japanese culture, and it practiced in schools as part of physical education classes. At the same time, judo is also seen as an exercise that contains high risks of physical injury to the player. So what motivates Canadian parents to make the decision and allow their children to practice and learn judo? This paper seeks to investigate the parents' understanding on this topic and looks at how the results found could be used in the guidance of children in Japan.

キーワード：意識調査、カナダ、少年柔道、カナダの保護者、柔道指導

I. はじめに

世界各国に広がる柔道であるが、柔道をする目的はどのようなものなのか。すでに柔道は国際柔道連盟において世界200カ国地域が加盟しており、世界では武道の柔道というよりスポーツとして定着している。大人は年齢の関係や意識の違いによって世界の頂点を目指すものから、健康のためと動機は様々である。

日本の少年柔道に目を向けると、少年柔道でも試合があり、その目的は、柔道学習、稽古した柔道の技能を試すことや将来的に日本選手を育成す

ることにつながっている。しかし、子ども達が通う道場の指導方針については様々である。試合に向けて指導している道場や、強化の意味でなく躰教育を中心に指導している道場もある。

柔道創始者の嘉納師範はハーバート・スペンサーの知育、徳育、体育の三育論⁹⁾を取り入れ柔道に三つの目的を持たせている。柔術では勝負に勝つことだけであったが柔道では体育と勝負と修身の三つの目的を持たせて、調和のとれた人間形成を目指したのである。

本来武術から出発している柔道は、勝負に勝つ

ことが大きな目的である。しかし、少年柔道においては、試合もあるが体を作ること、修身の中身である徳性を養う、知力を練る、を大切に指導すべきであり、勝負は体ができてくる中学生からでよいと思われる。講道館においても初段受験が中2からとなっているのもその考え方であろう。

保護者の柔道に対する意識調査は藤原¹⁾らによって報告されている。その研究は柔道に対する印象を中心とした意識の調査であった。

今回の研究目的はカナダにおいて、柔道の印象についてだけでなく、子ども達の親がなぜ柔道子どもにさせているのか、調査結果よりその理由を語彙収集によって分類し、カナダの保護者の子どもへの思いや期待を知ると同時に、日本を含めた海外の少年を対象とした指導の方向性を探ることである。

II. 方法

- 1) 調査期間：2017年3月9日から16日
- 2) 調査対象：カナダ・リッチモンド市S柔道クラブ少年の部保護者
- 3) 調査用紙及び実施方法：自由記述による、①なぜ、あなたはお子さんのために柔道を選ばれた(習わせている)のでしょうか。自由にお答え下さい。(Why did you think that you choose judo for your child? please answer freely.) ②あなたは柔道にどのような印象をお持ちでしょうか。(What kind of impression do you have of judo?) の二つの質問を、S柔道クラブの保護者に実施する。
- 4) 記述された語彙分類方法：分類手順は帰納的思考に基づいて行う。自由記述のための様々な言葉が表れるが、同じ表現や類似の表現があり、同義語の分類が可能である。但し、言語が英語のため、単語及びある程度意味をなす文章的な表現も対象とする。
- 5) 集計と処理：質問①の語彙分類結果に関して行う。主要項目については、単語の出現率は総記述数から行う。中間項目の出現率は、総記述数及び各主要項目の合計数に基づいて行う。

III. 結果と考察

調査対象者の内訳 (Table 1) は、30代の父親1名、母親9名、40代の父親7名、母親8名、50代の父親2名、母親2名の合計29名であった。彼らの子ども達は6歳から13歳までである。

Table 1 Number of People by Age

Number	Age	30's	40's	50's	Total
Father		1	7	2	10
Mother		9	8	2	19
Total		10	15	4	29

Children's age: 6 to 13 years old

1. 語彙分類表の完成

①「なぜ、あなたはお子さんのために柔道を選ばれた(習わせている)のでしょうか。自由にお答え下さい。」の質問に関してだけの語彙収集の結果である。表現内容から社会生活に関する社会生活関係 (Social life Relationship) と身体活動に関する身体活動関係 (Physical activity Relationship) の2大項目に収斂した。

2大項目の回答頻出数は合計177、内訳は社会生活関係119 (67.23%)、身体活動関係58 (32.77%) であった。

出現数の比較は社会生活関係の出現数の方が有意に身体活動関係の出現数より [CR (119 : 58) = 4.51 > 2.58, p=.01] も多かった。Table 2、3の括弧外の数値は項目内119、58に対する比率であり、() 内の数値は全体出現数に対する比率である。1人あたりの平均記述数は6.10語であった。

結果から考察を述べるが、その前に柔道の海外における立ち位置を理解する必要がある。特に西洋といわれる国々では、柔道はスポーツである。日本的に武道に位置づけての考え方はない。ましてや学校教育の中に「武道」として位置づけ、日本の伝統運動文化として学校体育のスポーツ種目の一つとして教えることはない。学校体育とスポーツの違いの問題もあるが、ここではそのことには触れない。西洋では、クラブ組織の中にあることを理解する必要があり、その観点を中心にカナダの保護者の意識を分析する。

Table 2 Social life Relationship

1) Activities in social life			3) Reputation		
discipline	teach (taught)	14	Instructor, Sensei, Teacher		
	to learn	9	They are great		3
	adopted	1	very good		3
	enhance	1	amazing		1
	promote	1	excellent		1
	sense of	1	skilled		1
ethics		1	volunteers		1
life skills		2	wonderful		1
		30			11
		25.21% (16.95%)			9.24% (6.21%)
2) Mental activity			Judo club		
	Interpersonal feeling		good reputation		3
respect	teach (taught)	11	great reputation		1
	learn	10	very kind		1
	develop	2	wonderful		1
	enhance	1			6
	judo is a	1			5.04% (3.39%)
	sense of	1			
commitment		1	Area		
compassion		1	community		4
humble		2			3.36% (2.26%)
relationships		1	Environment		
respectfulness		1	good place need a more focused environment		2
		32	to be successful		1
		26.89% (18.08%)	safe environment		1
	Personal feeling				4
confidence		5			3.36% (2.26%)
self control		4	About teaching		
focus (focused on attacking)		2	good method		1
aggressive		1	great program		1
assertive		1			2
attention		1			1.68% (1.13%)
concentrate		1			Reputation total
drive		1			27
foundation		1			22.69% (15.25%)
judo is good		1	4) Culture and Tradition		
life		1	cultural/heritage influence (japan)		1
liked judo		1	family tradition		1
mind		1	I wanted the same for my children		1
mindfulness		1	3rd generation Judoka		1
not to give up		1			4
self esteem		1			3.36% (2.26%)
to stand up for themselves		1			
will (his & her)		1			
		26			
		21.85% (14.69%)	()Ratio to total		119
	Mental activity total	58	CR(119 : 58)=4.51>2.58, p=. 01		67.23%
		48.74% (32.74%)	Total		177

Table 3 Physical activity relationship

<u>1) Related to the body</u>		<u>3) Martial arts (Budo)</u>	
health	4	Martial arts	11
balance	2	bleak-fall	1
physical exercise	2	gentle martial art	1
strength	2		13
all-round balanced	1		22.41% (7.34%)
coordination	1		
development	1	<u>4) Sport</u>	
flexibility	1	big sport	1
great exercise	1	dose not like physical contact sport	1
natural fit (for him)	1	(non-aggressive way)	
physical activity	1	ease with the physical aspect of sport	1
disease relationship contents	2	life long athletes	1
muscle development	(1)	non violent sport	1
muscle strength	(1)	no hitting sport	1
	19	respected sport	1
	32.76% (10.73%)		7
			12.07% (3.95%)
<u>2) Physical defense</u>		<u>5) Other items related to the body</u>	
self-defense	9	channel his energy	1
defend oneself	4	to use up some of his energy	1
defend herself	1		2
quarter combat	1		3.45% (1.13%)
protect herself	1		
physically protect	1	()Ratio to total	58
	17	CR(119 : 58)=4.51>2.58, p=. 01	32.77%
	23.31% (9.60%)	Total	177

2. 社会生活関係 (Social life Relationship) の特徴 (Table 2)

社会生活関係はTable 2にあるとおり社会生活活動 (Activities in social life) 出現数30、精神活動 (Mental activity) 出現数58・2小項目、評判 (Reputation) 出現数27・5小項目、文化と伝統 (Culture and Tradition) 出現数4の4中項目に収斂した。

1) 社会生活活動

社会生活活動で一番多かったのは規律 (discipline) である。discipline to teach というように使われていた。その使われ方は、教える14語、学ぶ9語、採用されている1語、高める1語、奨励する1語、センス1語であった。

その他は倫理観 (ethics) 1語、日常生活における技能 (life skills) 2語であった。

社会生活活動は社会生活で生きていく上で必要

なことについてのことである。柔道は規律を教えてくれる、学ぶことができる、採用されている、強める、奨励する、感覚を得る、の規律に関してのことが書かれていた。

カナダのバンクーバーは比較的整然とした町と思われるが、日本と比較すればそうでもなく、規律云々と言ってもさほど厳しさを感じることはない。しかし、出現数から子どもの教育には規律は必要であるとその重要性を保護者は思っていることになる。

新渡戸稲造が「武士道」⁵⁾で書いたように西洋では、宗教教育があり、その中で規律、倫理観を学ぶとあるが、家庭教育や学校教育だけではなく現在も宗教教育で行われていると推察する。そのことを念頭に置いて柔道の意識調査の結果から想像するに、宗教教育にプラスして柔道の場面もちいて意識の強化を図っているのであろうか。

その他倫理観、人生のスキルとあった。カナダにおいても社会生活では、秩序を守る規律、倫理観を大切なものと捉えており、生きていくためにそれらを身につけることが必要である。そして、S柔道クラブの指導者はそれを重要指導事項として子ども達に教えていることが保護者の目を通して理解することができる。

2) 精神活動 (Mental activity)

精神活動は対人関係意識・感情 (Interpersonal feeling) と個人的意識・感情 (Personal feeling) に分類することができた。

対人関係意識 (Interpersonal feeling) では尊敬 (respect) が規律の時と同じように teach (taught) respect というように使われており、教える11語、学ぶ10語、発達2語、向上1語、柔道は尊敬に値する1語、尊敬の感覚が身につく1語の順番で表れた。

具体的には、尊敬を教える、学ぶ、発達させる、強める、柔道は尊敬できる、尊敬の感覚を得るというように規律と同じよう尊敬の言葉に関連する現れ方をしており、思いも同様であろう。その他献身、思いやり、謙虚さ、人間関係の大切さ、尊敬の念などが表れている。

尊敬が多いというのは驚きである。日本語には尊敬の表現が多いと言うが、カナダではどうなのだろうか。尊敬の気持ちを表す表現はあると言うが、それは丁寧な表現という方がふさわしいと言われている。

尊敬とは対等な関係ではなく、上下関係的な意識の表れである。誰かに敬意を払う意識であり、憧れ、目標として他人の良きところを学び、自分の成長に結びつけて欲しいと保護者としては思っているのではないだろうか。

その他、現れている言葉もおおよその日本人が好む言葉である。西洋の大人も日本の大人も考え方は通じるところがあるといえよう。

個人的意識 (Personal feeling) では自信、自制、集中力に複数の出現数があった。その他、積極的な意味を有する言葉、基礎的、人生、あきらめない、自尊心等の言葉が現れ、自信を持って精神的に強く生きて欲しいという保護者の想いが表れている。

3) 評判 (Reputation)

評判では指導者 (Instructor)、先生 (Sensei)、柔道クラブ (Judo club)、場所 (Area)、環境 (Environment)、教えること (About teaching)、合わせて5小項目に分類することができた。

評判については、指導者、環境、柔道クラブ、場所、教えることについて評判が良いので通わせている、である。指導者は素晴らしく、安全でよい環境で、柔道クラブの評判が良く、コミュニティもよく、指導のプログラムも良いと絶賛していると思われる内容である。「よい」という言葉の規準であるが、想像しかできない。「よい」の漢字は良い・善い・好い・佳いである。この言葉を使用する際には、人間は他より優れている、まさっている、教養がある、能力が優れている、上手である、をイメージし言葉にしているが、保護者の立場から考えると指導者の教え方、姿勢、安全な場所、地域の評価の良さ等を考えていることになる。

指導者は実際に道場では、年配の日系人たちが多い傾向にあるが、西洋系の若い人も多く、若い白人女性で大学生の指導員もおり、子ども達に慕われている。保護者もコメントのなかに、全体を通して指導員の親身な指導ぶりに感謝の言葉が書かれてあったのが印象的である。

場所・地域 (Community) は、辞書では地域社会、利害・職業・宗教・国籍などを同じくする人の社会、集団、共同体 (ジーニアス英和辞典) とある。確かに、リッチモンド市の柔道クラブのある地域は、日系の人が多く、歴史的に和歌山県出身の人達のコミュニティと言われている。しかし、白人や中国系も多く多様な人種で形成されている町である。その中であって、道場はやはり日系人中心である。移民の文化が良き印象を持って地域に受け入れられている証拠である。

教えること (About teaching) については評判の流れとして出現したものと解釈できる。良き方法があり、良きプログラムがあり、それを良き環境の中で良き指導者達によって柔道クラブは運営されていると保護者達は考えている。

4) 文化と伝統 (Culture and Tradition)

最後は文化と伝統で4語彙を確認することがで

きた。ここでは、日本の伝統文化に触れる、父親が大学で柔道に出会いその影響で子どもに柔道を習わせている、3世代で柔道をしている、というコメントが見られた。このことは、柔道を子どもに習わせてもよい運動文化、運動であると捉えていることが推測される。

3. 身体活動関係 (Physical activity relationship) の特徴 (Table 3)

身体活動関係 (Physical activity relationship) は身体関係 (Related to the body)、身体的防衛 (Physical defense)、武道 (Martial arts / Budo)、スポーツ (Sport)、身体に関するその他の項目 (Other items related to the body) の5中項目に収斂した。

身体活動関係 (Physical activity Relationship) の内訳は、身体関係 (Related to the body) 出現数19、身体的防衛 (Physical defense) 出現数17、武道 (Martial arts、Budo) 出現数13、スポーツ (Sport) 出現数7、その他の身体に関連した項目 (Other items related to the body) 出現数2であった。

1) 身体関係 (Related to the body)

中では健康に関してのこと (health) が4語彙で一番出現数が多く、その他バランス、体を強くする等全般的に身体関係に関する表現が表れていた。中には、子どもが協調障害と低筋肉緊張を煩っており、筋肉の発達、強くするためにかかりつけの医師より柔道を進められ柔道をさせている例があった。柔道の動きが医学的にも筋肉の発達や総合的なバランスに良いと思われているということになる。

2) 身体的防衛 (Physical defense)

身体的防衛では自衛 (self-defense) が出現数9と一番多かった。このことは社会状況を反映しているのだろうか。コメントの中に「身を守る方法を学ぶ必要のある世界に育った女の子たちのために柔道を選んだ」というのがあり、身体防衛の目的で柔道をさせていることが理解できる。精神的な強さと合わせて自分自身を守れるようにとの思いがうかがわれる。

また、女子の子ども達はカナダにおいても身体接触や暴力的な動作を嫌う傾向にあるが、保護者

の中には柔道を非暴力的なスポーツとして捉えている人がいて、このスポーツは女子にもできるし、自衛のためにも柔道は良いとコメントしていた。

3) 武道 (Martial arts、Budo)

武道に関しては、マーシャルアーツの表現が出現していた。マーシャルアーツの意味は本来、格闘技としての空手・カンフー・柔道等を意味する英語である。従って日本で使用する武道的な意味ではないように思われる。しかし、gentle martial arts という言葉も表れており、紳士的な格闘技と訳することになると思うが、前述の内容にもあるように、柔道を暴力的でないスポーツとして捉えてもいると思われるが、S柔道クラブの保護者達は柔道を格闘技 (Martial arts) として捉える意識が強いということになる。

4) スポーツ (Sport)

スポーツではビッグスポーツ、非攻撃的スポーツ、生涯アスリート、尊敬に値するスポーツ等一般的なスポーツとして捉えるのと同じような表現の記述があった。ビッグスポーツは、規律や尊敬等を教える方法としての手段として位置づけ、柔道を捉えていた。

5) その他の項目 (Other items related to the body)

この項目では、channel his energy という表現があった。保護者のコメントは「息子がエネルギーを適切に流す・使うのを助け、自制と規律を学ぶのを助けると感じた」とあり、この考え方は日本の保護者にも通じるところがある。日本では「人様に迷惑をかけるな」という家庭教育での教えがあり、有り余った力は良きことにつかい消化せよ、である。このことと同様であろう。

S柔道クラブの保護者はエネルギーを悪い方に使うのではなく、柔道で身体的、精神的にも消化していることに感謝している、という表れを推測できる。

これらの二つの関係をまとめたものが Fig 1 である。

内容の詳細については Table 2、3 を再度参照するとして、社会生活関係と身体活動関係を出現数から比較するとカナダのS柔道クラブ少年部の保護者は社会生活関係の出現数 (119/177) が多かったことから、人間関係を大切にしながら、社

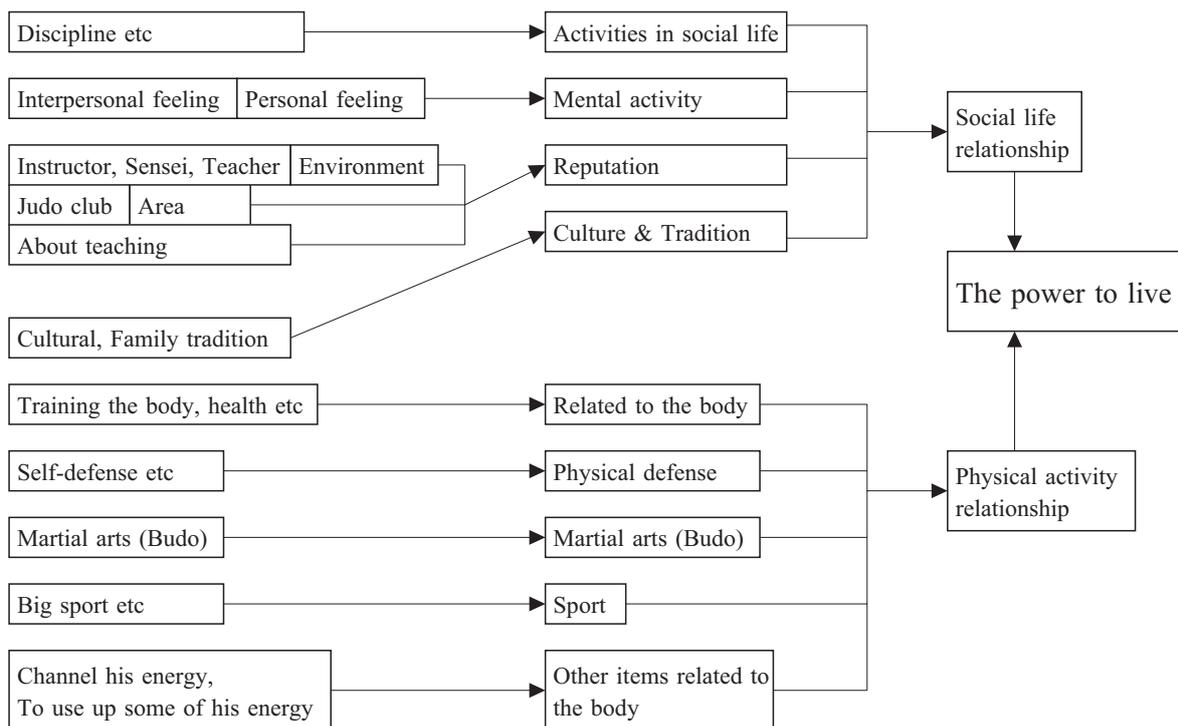


Fig 1 Convergence Diagram

会で生きていくための社会の仕組みを理解し、うまく溶け込んでいくことを願っていることを示唆している。

身体活動関係に関しては、健康への意識、身体を発達させ、鍛えること、身体的な自衛、スポーツとして楽しむこと、格闘技等しての武道、エネルギーの使い方として適していると考えていることがうかがえる。

これらのことが結果として、「生きる力」を身につけて欲しいと考えていることが推察できる。

IV. まとめ

この研究はカナダ・リッチモンド市S柔道クラブの少年部の保護者に対して①、②の質問調査を実施し、その中の①の質問、なぜ自分の子ども達に柔道を習わせているかに限定し、まとめたものである。

保護者には、質問に自由記述を求めた後、帰納的思考による語彙分類を行った。その結果、大きく社会生活関係 (Social life Relationship) と身体活動関係 (Physical activity relationship) に収斂した。社会生活関係では、大きく4項目に、身体活動関係では、大きく5項目に分類することができた。

語彙出現数については、社会生活関係の方が身体関係の出現数よりも有意に多かった。S柔道クラブの保護者の意識調査結果は以下の通りである。

1. 社会生活関係 (Social life Relationship)

保護者は柔道からは、規律、尊敬、自信、自制心、集中力等のメンタル面を学べることを重視しており、そのためには優れた指導者がいて、適切な指導法やプログラムがあり、良き環境の中にある柔道クラブで学ぶのが良く、また日本の伝統文化に触れることも価値あることと考えていた。

2. 身体活動関係 (Physical Activity Relationship)

健康のため、全身のバランスがとれる、筋肉が発達する、自己防衛力が身につく、非暴力的なスポーツ、武道、エネルギーの使い方等に関する事などが良き印象を保護者に与えていた。

3. 保護者の思いと少年対象の柔道指導の方向性

リッチモンド市S柔道クラブ少年の部保護者は自分の子ども達を将来的に柔道選手に育てると現段階では考えておらず、社会生活におけるスキルを学び、社会で「生きる力」を身につけて欲しいと考えていた。

カナダの一道場の保護者の意識ではあるが、彼らは子ども達を柔道チャンピオンにすることを願っ

てはいない。指導者達も同様である。

このようにカナダに限らず、これからの柔道における少年指導は、日本の講道館の目標に「青少年の育成」とあるように基本的に一般の子どもと同じ教育の視点を持ってあたることが求められていることを示唆している。それはけしてチャンピオン育成ではなく、人間形成である。

日本の現状として小学生から全国大会があり、そのため指導者は勝つ柔道を目指している傾向がある。しかし、本来「健全なる精神は健全なる身体に宿る」と言われるように、少年には健康・健全な肉体と健全な精神の育成が必要である。

指導者は将来の社会で通用する躰教育に代表される社会的スキルを身につけることを中心に健康な体づくり等を第一義に考えて子ども達に接するべきである。

参考引用文献

- 1) 藤原修一他：講道館柔道科学研究会紀要第13輯、講道館、135-145、2011
- 2) 岩原信九郎：教育と心理のための推計学、日本文化科学社、1991
- 3) 松本純一郎他：講道館柔道科学研究会紀要第13輯、講道館、193-201、2011
- 4) 向井幹弘：役に立つ少年柔道指導法、日本武道館、2012
- 5) 新渡戸稲造（奈良本辰也訳）：武士道、9刷、三笠書房、3、1997
- 6) 尾形敬史他：講道館柔道科学研究会紀要第11輯、講道館、115-128、2007
- 7) 斎藤正俊他：大阪武道学研究第12巻第1号、日本武道学会大阪支部、17-21、2003
- 8) 斎藤正俊他：講道館柔道科学研究会紀要第14輯、講道館、181-189、2013
- 9) 佐々木武人他：現代柔道論、大修館書店、22、1993